

第46回例会概要

2001年6月2日(土)に、本会の第46回例会が筑波大学学校教育部において開催された。例会で行われた大関泰宏氏(岐阜大学教育学部)の講演と篠塚明彦氏(筑波大学附属駒場中・高等学校)の実践報告の要旨は以下の通りである。

小学校社会科における教科書検定の観点

大 関 泰 宏*

学習指導要領の改訂にあわせて1999年1月に義務教育諸学校教科用図書検定基準の見直しが行われた。検定制度全体を通じての見直しでは、検定のプロセスの簡素化と情報公開が改訂の大きな柱となっている。誤記・誤植等審査および検定意見に従った修正以外の修正が廃止されることにより、申請図書に対する出版社の責任は従前以上に重くなっている。また、検定意見の通知が文章化されたことは、検定プロセスの透明性を高める一方で、国民の側にも教科書に対して従前以上に関心を持つことが求められている。

小学校の社会科に関しては、94年、98年および2000年の3回の検定を通じてマスコミが大きく取り上げたいわゆる「国旗・国歌」の問題がある。これに関して、98年までは「国旗はどこの国でも大切にされている」で許容されていたのが、2000年の検定では「大切にしないではいけない」というより主体的な態度を示す表現に改められている。2000年の検定に特徴的な事例としては、小学校中学年の地域学習「地域の人々の生産や販売について、…見学したり調査したりして調べ…」という学習指導要領に関連した検定意見がある。総合的な学習の時間を意識してのことと思われるが、申請図書の段階では生産・販売されているもの、例えば煎餅を学校で料理したり食べてみるという体験的な学習内容が大きく取り上げられていた。社会科は体験的な学習を否定するものではないが、授業時数が大きく削減されていること、および総合学習を支援する意味でも社会科固有の基礎基本が重視されることから、教科書レベルでは指導要領の「見学したり調査したり」の扱いを大きくすることが求められている。

小学校社会科の教科書検定は、義務教育諸学校教科用図書検定基準に掲げられた全部で31項目の観点に従って行われるが、それらは上記のような学習指導要領に関連する項目とその他に大きく二分することができる。また、検定基準に明記されているものとしては、「範囲及び程度」、「選択・扱い及び組織・分量」および「正確性および表記・表現」の三区分がある。「範囲及び程度」では、学習指導要領に対して過不足がないこと、および児童の発達段階に適応していること、二点を求めている。後者の事例として、5年生の食料生産に関する学習で自給率や食料輸入のグラフを扱う際に注意すべき点がある。100%を超える表示やある年次を100とする指数表記が5年生の発達段階に適応していないと検定で判断されている。

「選択・扱い及び組織・分量」の観点は、検定基準としては21項目にも及ぶ。教科書検定のいわゆる「近隣諸国条項」もここに含まれており、歴史的事象の記述に対して「扱いが一面的である」との意見が付されることも少なくない。例えば、大日本帝国憲法のプラスの側面に触れない記述に対して意見が付され、当該憲法によって「近代的な国のしくみが整えられました」という文言が追加されている。また、申請図書においてもいわゆる「従軍慰安婦」問題が存在すること

*岐阜大学教育学部

を示している。この記述に対しては「正確性及び表記・表現」上の問題も指摘することができ、「若い女性も、工場などになり出されました」と修正されている。修正文中の「など」は現在の検定制度の限界を示すものといえよう。

その他、「特定の営利企業、商品などの宣伝や非難になるおそれのあるところはないこと」の観点によって、写真中の企業名を書き換える修正が行われるが、その結果として教材が社会のどこにも実在しないものとなる。教科書を使用する児童が誤解しないよう配慮が必要な部分である。

日本史との関係を視野に入れた世界史授業

—17世紀・オランダの世紀を題材に—

篠塚明彦*

1 はじめに

17世紀、いわゆる鎖国下の日本において正式に交易を行っていた西欧の国がオランダ一国であったのは偶然ではなかった。世界史的動きのなかで、必然的に江戸時代の日本と交易を行なう西欧諸国がオランダに限定されていったのである。世界史的な視野で17世紀という時代を捉え、そのなかに日本の動きも位置付けることで、江戸時代の日蘭関係をより深く理解することができる。また、日本との関係を見ることで商業国家オランダの様子や「17世紀＝オランダの世紀」ということがより捉えやすくなるのではないだろうか。

2 授業の展開

テーマ：オランダの繁栄と日本

①オランダと日本の関わりの始まり

- 資料をもとにリーフデ号やヤン＝ヨーステンの活動について確認。

*八重洲口のリーフデ号やヤン＝ヨーステンのレリーフなどを題材とする。

- 平戸に「オランダ商館」(＝オランダ東インド会社の営業拠点) 開設のことを説明。

②「鎖国」の完成

- 鎖国令の史料を読ませ、どのような性格の史料かを発問。
- 鎖国下、ポルトガル・スペインが日本貿易から撤退したことを確認。
- オランダ商館の出島移転、出島での活動の全盛期が元禄年間までであったことを確認。

③オランダ商館の取扱商品

- 史料をもとに取扱商品の内容を確認。
- 輸入品の特徴について発問。

*オランダの貿易が典型的中継貿易であったことを気づかせる。

④オランダ東インド会社と商業国家オランダ

- 史料をもとに東インド会社の性格を確認。
- 資料をもとにオランダの独立およびオランダにおいて大商人が大きな権限を握っていたことを確認。
- 17世紀＝オランダの世紀といわれるほどに繁栄したことを説明。あわせて、日本貿易との関わりを説明。

*筑波大学附属駒場中・高等学校

⑤グロティウス『海洋自由論』

- この時代（17世紀）にグロティウスがなぜ「公海」の概念を提唱したか、その背景について発問。
 - * 現代社会になどにおいて既習の事項との関連。
 - * ポルトガル・スペインの覇権に対するオランダの挑戦という側面を気づかせる。
- 海上の覇権がスペインからオランダに移っていたことを説明し、まとめる。
 - * 鎖国下の貿易相手がオランダに限定されたことの背景を再確認する。

3 教材作成の視点

日頃、世界史の教材を作成するにあたっては、以下のような点を考慮している。

- ① 日本史と世界史の統一的把握
日本と世界が個別に存在するのではない。日本も組み込んだ形で世界の動きを見る。
 - ② 身近なところに世界史を見つける
外国に行かなくても世界史に触れることのできる身近な場所やモノを取り上げる。
 - ③ 他の科目・教科との関連
他の教科・科目で学んだことを世界史を通して結び付けていく。
- 以上のような点を踏まえて作った教材の一例が、今回紹介した「オランダの繁栄と日本」である。